芸　　術

1　芸術科の教育課程の編成

今回の改訂により、普通科における各教科･科目の履修について、「すべての生徒に履修させる単位数は、３単位を下回らないこと。」という規定が削除されたが、各学校においては、生徒の選択履修の幅をより一層拡大し、創意工夫を生かした教育活動を展開することのできる教育課程を編成することが求められている。

したがって、教育課程の編成に当たっては、各学校の実態を踏まえ、生徒が興味・関心等に応じ、芸術に関するIIやIIIを付した科目を選択履修できるよう配慮する必要がある。

また、他の芸術科目の並行履修や次の学年で異なる科目を履修できるよう弾力的に編成したり、芸術に関する学校設定科目を開設するなど、生徒一人一人が個性に応じてそれぞれの能力を伸ばすことができるよう工夫することが大切である。

2　音楽の指導計画の作成と内容の取扱い

(1)　指導計画作成上の留意点

指導計画の作成に当たっては、各学校の教育目標を踏まえ芸術科の教育目標を具現化できる内容にするとともに、学習指導要領の内容に沿った計画を立てる必要がある。

今回の改訂においては、中学校の履修においても表現方法や表現形態を選択できるなど、これまで以上に一層多様な学習が可能となっており、生徒の能力や興味・関心及び学習体験が一層多様になることに留意する必要がある。

また、指導と評価が一体となるよう個人カルテやチェックカードを作成するなど、授業者が創意工夫することが重要である。

(2)　内容の取扱い

ア　特定の活動のみに偏ることなく、表現と鑑賞にわたる調和のとれた活動、及び相互に関連した活動を工夫すること。

イ　音楽Ｉでは生徒の個性に応じて表現方法、表現形態の選択、音楽IIでは「歌唱」、「器楽」、「創作」の中からいずれかを選択できるなど、表現方法や表現形態を生徒が適宜選択できるようにすること。

ウ　生徒自らが課題を設定し、解決を図っていく活動を通して、生徒の意欲や主体性を高め成就感や自信を持たせること。

エ　表現領域の「歌唱」、「器楽」に我が国や郷土の伝統音楽の学習を取り入れること。

オ　我が国の伝統的な歌唱及び和楽器を含めて扱うようにすること。

カ　「視唱力」、「視奏力」の指導については、単なる技術指導に偏らないこと。

キ　「我が国の伝統音楽」の鑑賞を発達段階を考慮し、充実させること。

ク　「音楽Ｉ」、「音楽II」の鑑賞では、アジア地域の諸民族を含めて扱うとともに、国際理解の視点から、世界の諸民族の音楽の学習を含めて扱うようにすること。

(3) 「音楽Ⅰ」の年間指導計画（例）

学期	月	時数	題材	指導内容	教材	表現								鑑賞				評価の観点			
						ア 曲種に応じた発声の工夫	イ 視唱力・視奏力の伸長	ウ 歌詞及び曲想の把握と表現の工夫	エ 合唱・合奏における表現の工夫	オ いろいろな楽器の体験と奏法の工夫	カ 曲の構成及び曲想の把握と表現の工夫	キ いろいろな音階による旋律の理解	ク いろいろな音楽材を生かした即興的表現	ア 声や楽器の特性と表現上の効果	イ 楽器の歴史的背景	ウ 我が国の伝統音楽の種類と特徴	エ 世界の諸民族の音楽の種類と特徴	ア 関心・意欲・態度	イ 音楽的感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
1学期	4	4	オリエンテーション	アンケート・小テスト （中学校までの学習経験を把握） 高校の音楽の位置付け	先輩の演奏（テープ・ビデオ） リズムソルフェージュ 木製リコーダーの扱い方		○				○			○				○			
	5	6	身のまわりの音と音楽	生活環境音→サウンドスケープ 自然音から音楽へ	LD・ビデオ								◎				○	○			○
	6	8	アンサンブルから合唱・合奏へ	アルトリコーダーの基礎的奏法の習得	竹田の子守歌 ジムノペディ グリーンスリーブス		◎	○	○	○								○	○	○	
	7	4	グループ演奏	グループ演奏を通して主体的な活動を促す。 個人評価と相互の評価	アルトリコーダー小曲集		○	○	○	○	◎							○	○	○	○
2学期	8 9	4 8	合唱や合奏の喜びを知る。	豊かな響きとハーモニー ギターの基礎的奏法と合奏	アニーローリー ギター・テキスト		○	◎	◎	○								○	○	○	
	10	8	独唱にチャレンジ ヨーロッパの音楽と歴史	イタリア語の発音と発声法 グレゴリオ聖歌・オペラの誕生 バロック・古典派の音楽・ロマン派の音楽・現代の音楽	Caro mio ben CD・VTR 音楽史資料 オーケストラ・スコア	◎	○	◎			○				◎		○	○ ○	○	○	○
	11	8	いろいろなスタイルの発声と呼吸法	曲種に応じた発声を工夫する。	リパブリック讃歌 ソーラン節	◎		○			○							○	○	○	
	12	4	日本の音楽とアジアの音楽	アジアの音楽を学び音楽と文化の関わりを考える。	雅楽・尺八・長唄 ガムラン音楽 シタールの音楽									◎	○	◎	◎	○			○
3学期	1 2	4 6	和楽器に挑戦 箏の音色を味わい奏法を学ぶ。	和楽器独特の音色や奏法を学ぶ。 （地域の講師に奏法を学ぶ。） グループによる合奏とクラス全員の合奏	箏曲テキスト さくら変奏曲			○		◎		○		○		○		○	○	○	
	3	6	わらべうたを作る。 まとめ	四音で創作 作品の発表、相互評価 1年間を振り返って	先輩の作品 例「あんたがたどこさ」など						○	◎	○	○		◎		○	○	○	○

◎中心となる指導内容　○関連する指導内容

3　美術の指導計画の作成と内容の取扱い

(1)　指導計画作成上の留意点

指導計画の作成に当たっては、「生きる力」の育成を目指している学習指導要領の基本的な考え方を踏まえ、生徒が自ら課題を決め自ら学習を追求できるよう学習内容や活動の多様化を図る必要がある。

したがって、「造形的表現・創造力、芸術文化の理解、心の教育」という美術の科目の性格を明確にするとともに、美術を愛好する心情と感性を育て豊かな情操を一層養い、創造的な発想力や「形、色、材料」で表す表現力、個性を生かした豊かな鑑賞力などを育てることができるよう生徒個々に応じた柔軟な指導計画を作成することが大切である。

また、評価については、作品のみでなく制作過程を重視した評価の観点を明確にし、生徒の自己評価や生徒と教師が批評し合うなど、指導と評価の一体化を目指した多面的な評価ができるよう創意工夫することが必要である。

(2)　内容の取扱い

ア　写真、ビデオ、コンピューター等を利用し、ビジュアル・コミュニケーション能力の育成のために新設された「映像メディア表現」を積極的に取入れるようにすること。

イ　表現分野を選択して扱ったり、互いに関連付けたり一体化したり、「鑑賞」と合わせて扱うなど、学校の特色や生徒の個性を生かした指導が柔軟に行えるようにすること。

ウ　我が国及び諸外国の美術文化や表現などの特質についての関心や理解、作品の見方を深めるなどの鑑賞の指導を充実させるようにするとともに、鑑賞に当てる授業を適切かつ十分確保するとともに、地域の施設や人材等の活用を積極的に図ること。

エ　「美術Ⅰ」は、美術を履修する生徒のために設けられている最初の科目であることから、中学校美術の学習を踏まえ、「A　表現」と「B　鑑賞」の両者の調和のとれた幅広い活動を展開し、基礎的な能力・態度を育てるとともに、美術についての総合的な理解を深めるよう配慮すること。

(3)　「美術Ⅰ」の年間指導計画（例）

学期	月	週数	単元（項目）	指導内容	指導のねらい	予定時数	留意事項
前期	4	2	オリエンテーション 鑑賞　ピカソについて	・美術の目標と授業内容 ・作家研究（ビデオ教材）	・授業への参加意欲を高める ・20世紀を代表する画家の生涯を理解するとともに心情に触れる。	鑑 2 鑑 2	アンケートの記入 鑑賞ノートの記入
	5	3	表現　絵画・自画像	・表情豊かな顔のデッサン	・観察を通じて真摯に自己を見つめる姿勢と、素描の技能を高める。	表10	鉛筆、木炭、ペン パステル、水彩などの様々な表現材料
	6	4	表現　絵画＋デザイン ・心の風景	・現在の心境のイメージ化 ・色彩と形の平面構成	・造形要素の理解と表現への構想をまとめる能力を身に付ける。	表14	アクリル絵の具 イラストボード
	7 8	2 2	鑑賞　日本美術の中の自然	・日本の色彩と形の美しさ ・日本美術の表現の特質	・生活と自然が、日本美術の表現とどう関わってきたのかを知る。	鑑 6	研究テーマ・資料等 パネルにて発表
	9	4					
後期	10	4	表現　絵画・四季を感じて	・四季を主題とした自由な発想	・意図に応じての表現方法の工夫	表14	水彩、墨、アクリル 様々な表現技法
	11	4	鑑賞　現代美術	・作品研究 ・自己表現手段の広がり	・作者の心情、表現の工夫を知るとともに考え方感じ方を自覚する。	鑑 2	図書館の活用 研究リポート
	12 1	2 2	表現　彫刻＋デザイン ・リサイクルアート	・表現テーマの明確化 ・立体造形の工夫	・各自のテーマに従い色彩や材料の生かし方や制作の方法を考える。	表10	デザインパネル 材料（部品）収集
	2 3	3 3	表現　映像メディア 写真・パソコン 美術Ⅰのまとめ	・写真を主としたコラージュ 1年間を振り返っての反省と自己評価	・美術Ⅰでの自らの制作の記録をコラージュ風にまとめ作品化する。 ・今後の創作活動へ向けて	表 8 鑑 2	インスタントカメラ、 デジタルカメラ

4　工芸の指導計画の作成と内容の取扱い

(1)　指導計画作成上の留意点

指導計画の作成に当たっての考えは「美術」とほぼ同じであるが、工芸の特質である「創造的ものづくり、芸術文化の理解、心の教育」という学校教育としての工芸の科目の性格を明確にすることが大切である。

(2)　内容の取扱い

模型やレンダリングなどの視覚的情報表現によって、自分の考えや伝えたい内容を表現し、交流できるように工夫したり、量産を目的とした生産のための制作として新しく設けられた「プロダクト制作」を積極的に取り入れるようにする必要がある。

「工芸Ⅰ」は、工芸を履修する生徒のために設けられている最初の科目であることから、中学校美術のデザイン・工芸や鑑賞等の基礎的な学習を踏まえ、工芸の「A　表現」と「B　鑑賞」について幅広い活動を展開して、「工芸Ⅱ」、「工芸Ⅲ」へ発展させる基礎を養うとともに、工芸についての総合的な理解を深めることが必要である。

(3)　「工芸Ⅰ」の年間指導計画（例）

学期	月	週数	単元（項目）	指導内容	指導のねらい	予定時数	留意事項
前期	4	2	オリエンテーション	・工芸の役割と工芸学習について		鑑2	
	5 6	3 4	鑑賞　日本の陶芸文化 表現　陶土によるコーヒーカップの制作	・伝統的な陶芸について知る。 ・素材の特性　・制作プロセス ・アイデアスケッチ ・成形技法　・施釉　・焼成	・作者の心情や制作意図に触れる。	鑑2 表12	画集や情報機材の利用
	7 8 9	2 2 4	表現　プロダクト	・身の回りの量産品への興味関心 ・新しいモノを作り出すための構想と制作過程を考える ・模型づくりと創意工夫の交流	・ひとつの作品（物）を作りあげて行くために仮想体験とする。	表18	調査研究
後期	10 11	4 4	鑑賞　木の工芸 表現　木工による時計の文字盤の制作	・日本独自の木の文化に触れる。 ・アイデアスケッチ ・ウッドスライスシートの使用法 ・塗料の種類と塗装の作業手順	・日本人と自然の関わりを考える。	鑑2 表14	木材の種類と特徴 木工用具の使い方
	12 1 2	2 2 3	鑑賞　生活と工芸 表現　編組による藤かごの制作	・生活の中に生きる工芸を学ぶ。 ・素材の特性　・基本編成（芯） ・組、編み、止め等の技法	・機能美や手作りの良さを感ずる。	鑑2 表16	
	3	3	工芸Ⅰのまとめ	1年を振り返っての反省と自己評価	・今後の創造活動へ向けて	鑑2	

5　書道の指導計画の作成と内容の取扱い

(1)　指導計画作成上の留意事項

指導計画の作成に当たっては、学習指導要領改訂の基本理念を踏まえ、生徒一人一人がゆとりの中で楽しみながら書にかかわり、基礎的・基本的な内容を確実に身につけることができるようにするとともに、生徒一人一人の興味・関心等に応じ、選択履修や発展的な学習をすることができるよう留意することが必要である。

したがって、書道Ⅰ～Ⅲの必修と選択の「幅」を具体的にし、１学期は同一教材による共通課題の学習、２学期はコース制や選択学習とするなど、各学校の実態に対応した工夫をするとともに、シラバスに基づいたガイダンスを実施して学習目標を提示するなど、個に応じた指導計画作成の支援をすることが求められている。

その際、知識の理解や技能的な面の伸長を図るだけではなく、書道教育を通して美しいものに素直に感動したり、豊かな情操や他者の気持ちを思いやる優しさの育成を図るようにするなど、調和のとれた人間形成に寄与していくことが大切である。

また、指導に当たっては、従来の指導観、鑑賞の視点にとらわれず、柔軟かつ幅広い視点に立ち、書道カード、鑑賞カードなどの活用を工夫しながら、表現及び鑑賞の学習を生徒主体の学習として推進するとともに、「ものをつくる」という活動の中で、成就感・完成・途中の喜びを生徒に感じさせる場面を作りながら（指導と評価の一体化）、書道の学習を通して感性の育成を図るという視点が大切である。

(2)　内容の取扱い

ア　「書道Ⅰ」においては、「Ａ　表現」の３分野のうち「漢字仮名交じりの書」が必修として残ったことの意味を踏まえ、配当時数も他の２分野「漢字の書」、「仮名の書」より少なくならないような指導計画を立てること。

また、この３分野の扱いについては、特に順序が示されていないことから、各学校の実態に応じて工夫すること。

イ　「Ｂ　鑑賞」については、「Ａ　表現」と相互の関連を図れるよう配慮するとともに、教材の取材と精選、情報機器や地域の施設を利用した提示方法の工夫、掛け軸や床の間などといった書を取り巻く文化に対する鑑賞の視点の導入などを図ること。

ウ　学習カルテ、書道カード、鑑賞カードなどの作成に際しては、生徒自身が自らの学習の過程を振り返りつつ新たな課題を見つけられるよう指導と評価の一体化への工夫をすること。

エ　身の回りのデザイン、歌詞、コピーなども取込みつつ、日常生活における書や文字文化への一層の理解を図るとともに、その取り扱いについては、国語の表現として適切かどうか十分検討すること。その際、著作権等に常に配慮すること。

オ　中学校書写との関連性を踏まえた観点から、小・中学校の書写の中身について十分理解するとともに、生徒個々の実態に応じた指導計画となるよう配慮すること。

カ　生徒が書道の学習を通して自我に目覚め、自分の個性と対峙し、より主体的な学習を推進するために、教師の一方的な価値観の押しつけにならぬよう生徒主体の学習を指向した指導理念を確立すること。

(3) 「書道Ⅰ」の年間指導計画（例）

学期	月	時数	単元（項目）	指導内容（題材）	留意事項	評価の観点 ※①	※②	※③	※④
1	4	4	オリエンテーション	・書道の学習について　・自分の書道体験について ・自分の目標について考える	・生徒の書道体験を個人カードに記入させ、今後の参考とする。	○			
	4・5	6	漢字仮名交じりの書(1)	・日常生活と書 「手紙・はがき」	・野口シカ書簡 ・硬筆を含む。		○		○
	5	2	書道展の鑑賞	・書道展の観覧 ・書道のジャンルについて	・鑑賞レポートを記入させる ・鑑賞のマナーについても指導する。	○			○
	6	6	漢字仮名交じりの書(2)	・用具用材について　・執筆法について 「アンパンマンの歌」、「○○な風になる」	・言葉から受けるイメージの表現 ・用筆法による線質の違いに気付かせる。		○	○	
	6・7	4	篆刻	・一字印の制作	・様々な書体を調べる（簡単な隷書も含む。）。 ・完成作品の展示と使用の実際（効果）		○	○	○
2	8	2	拓本	・拓本の見方と採り方	・グループによる学校周辺でのフィールドワーク ・実物と拓本の違いを比較	○			○
	8・9・10	18	古典の学習	①総合コース：九成宮醴泉銘、龍門造像記、建中帖、蘭亭序、高野切第三種 ②漢字コース　六朝コース：龍門造像記、鄭羲下碑、高貞碑、蘭亭序 唐代コース：九成宮醴泉銘、孔子廟堂碑、雁塔聖教序、枯樹賦 顔真卿コース：顔氏家廟碑、建中帖、祭姪稿、争座位稿	・古典の概観（鑑賞・ガイダンス） ・コース別シラバスの配布 ・学習カルテに制作の過程と評価を記入しながら個の課題を明確にする ・条幅作品の制作を含む。	○	○	○	○
	11・12	8	漢字の書（創作）	・少字数による漢字作品の創作	・制作カードへの記入 ・古典に基づく表現の構想と工夫	○	○	○	○
3	1・2	14	漢字仮名交じりの書(3)	・作品構成と運筆のリズム ・意図に基づく表現の構想と工夫 ・作品の裏打ち 「北の大地に生きる」、「この大空に翼広げ」、「校歌」	・制作カードへの記入 ・グループによる合同制作を含む。 ・参考作品の鑑賞（中川一政・須田剋太・会津八一・良寛・先輩の作品） ・題材の取材	○	○	○	○
	3	2	1年のまとめ	・パネルによる作品の校内展示	・展示された作品の鑑賞及びレポート	○			○

※①関心・意欲・態度　※②芸術的な感受や表現の工夫　※③創造的な表現の技術　※④鑑賞の能力

6 質疑応答

問１　芸術科として学校設定科目を開設する場合の留意点は何か。

今回の改訂の趣旨を踏まえ、調和のとれた人間形成を図るためにも、各学校における教育課程の編成に当たっては、芸術四科の設置とⅠ～Ⅲを付した科目の開設が望まれる。さらに、生徒のニーズに対応しつつ、豊かな個性と特色ある学校づくりを進める観点から、芸術科の目標に基づき、積極的に学校設定科目を設置するなどして、生徒が興味・関心を持ちながら主体的に取り組めるような題材や教材の研究・開発が求められる。

また、実際の授業に当たっては、地域の施設や人材の活用を図ったり、少人数指導やグループ活動を取り入れるなど、授業形態を工夫することも必要である。